九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

依頼に対する「断り」のストラテジーの日中対照研究

季，江静

https://hdl.handle.net/2324/1500473

出版情報：九州大学，2014，博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

KYUSHU UNIVERSITY

氏　　名	季　江静		
論　文　名	依頼に対する「断り」のストラテジーの日中対照研究		
論文調査委員	主　査	九州大学	教　授　　松永　典子
	副　査	九州大学	教　授　　松村　瑞子
	副　査	九州大学	准教授　　志水　俊広
	副　査	九州大学	准教授　　郭　俊海
	副　査	東京外国語大学	教　授　　藤森　弘子

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本研究は、ポライトネス理論に基づき、依頼に対する「断り」のストラテジーについて日中対照研究を行い、中国におけるコミュニケーションのための日本語教材開発へ還元することを目的とする研究である。

従来、日本語母語話者（以下 JJ）の言語行動は、一般的に曖昧で間接的であると言われている。特に「断り」という発話行為については、直接的に行うことを避ける傾向がある（生駒・志村　1993 等）。一方、中国語母語話者（以下 CC）は JJ と比べ、直接的な「断り」の使用が比較的多いと指摘されている（劉・小野　1996 等）。

しかし、「断り」行為というものは一発話で完結することはほぼないため、従来の日中「断り」行為についてのほとんどの研究が用いている談話完成テスト（Discourse Completion Test　以下 D.C.T.）による調査では実際の「断り」行為を構成する談話の展開の仕方が不明である。また、自然談話においても JJ が直接的な「断り」を行わない傾向があるのかどうか、CC が結論先行型の直接的な「断り」を行う傾向があるのかどうか、ストラテジー使用の実態についてはまだ解明されていない。

そこで、本研究は D.C.T. とアンケート調査だけではなく、日中テレビドラマ調査及び自然談話調査を併用して調査を行った。その結果、D.C.T. とアンケート調査では、若年層の JJ、特に男性の場合、{結論} という直接的な「断り」を多用する傾向にあることが示された。ここには他人と距離を置きたい欲求（ネガティブ・フェイス）が働いていることが窺える。CC の場合には、婉曲さを重視する {理由} {詫び} {代案} などの間接的な「断り」を多用する傾向が見られた。

一方、テレビドラマ調査と自然談話調査では、JJ の場合には {結論} という直接的な「断り」、{詫び} {理由} {ためらい} などの間接的な「断り」双方の使用が認められた。また、CC には {結論} を多く用いる傾向があるという点は従来の見方と一致している。しかし、JJ がきまりきった談話展開のもとに「断り」行為を行っているのに対し、CC は {結論} 以外に、{呼称} {理由} {代案} {確認} などの多様な「断り」のストラテジーを用いて「断り」を遂行していることが新たに明らかになった。ここには相手との距離を縮めたい欲求（ポジティブ・フェイス）が働いていることが窺える。

これを踏まえ、学習者の「断り」のストラテジーの習得の実態を探るべく、上記 D.C.T. とアンケート調査を用い、在日中国人日本語学習者（以下 CJJ）及び在中中国人日本語学習者（以下 CJC）による「断り」のストラテジーを考察した。その結果、CJJ の「断り」は CJC より JJ に類似していること、一方、CJC の「断り」は、CJJ よりもむしろ CC に近い「断り」方をする傾向があることを明

らかにした。この結果から CJJ の場合は日本語環境による影響があり、CJC の場合は環境のみならず母語による影響があることが窺える。また、学習者は話す相手や場面によって相手との距離感を測り、それらをもとにポライトネス・ストラテジーの使い分けを判断していることもわかった。

以上の JJ と CC の「断り」のストラテジー使用の実態、学習者の習得の実態を踏まえ、自然談話場面で見られる「断り」がどのぐらい、現在使われている日本語教科書の会話例に導入されているかという点について、日中日本語教科書調査を行った。その結果、大半の教科書では、場面や登場人物などについての説明が十分なされておらず、学習者のストラテジー習得が考慮されていないという問題点があること、特に中国で出版された教科書には自然談話と比較して談話の展開や表現に不自然さが見られることが判明した。

最後に、以上の調査結果をもとに、中国におけるコミュニケーションのための日本語教材作成に対しての提言を行った。

各章の主な内容は以下の通りである。第 1 章では、本研究の背景、目的と意義、研究方法と本研究の構成について述べている。第 2 章では、先行研究を概観し、先行研究の問題点と本研究の課題を明確にしている。第 3 章では、D.C.T.調査を行い、JJ と CJJ の「断り」のストラテジーを比較し考察している。第 4 章では、JJ、CC、CJJ と CJC の 4 グループを対象として、JJ と CC との「断り」行為の類似点と相違点を明らかにしている。さらに CJJ と CJC が使用するストラテジーをそれぞれ JJ の使用するストラテジーと比較し考察している。第 5 章では、日中テレビドラマにおける会話の中から、依頼に対する「断り」表現に注目し、JJ と CC のそれぞれの「断り」のストラテジーを分析している。第 6 章では、自然談話分析に基づき、大学と職場における JJ と CC による実際に使われた「断り」の特徴を明らかにしている。第 7 章では、中国で出版された 4 冊の日本語教科書及び日本で出版された 4 冊の日本語教科書を中心に、「断り」表現の取り扱い方を考察している。第 8 章では、ポライトネス理論に基づき総合的考察を行い、日本語教育への提案と今後の課題を述べている。

以上のように、本研究は日中母語話者を対照した比較言語語用論と、日本在住・中国在住の日本語学習者のストラテジー使用の実態を示す中間言語語用論とを統合的に結び合わせ、中国におけるコミュニケーションのための日本語教育研究への新たな知見を加えるものとなっている。以上の理由により、博士（比較社会文化）の学位に値すると判断される。